トリイ・ヘイデン（Torey　Hayden）　1951 年５月 21 日、米国モンタナ州で生まれる。

母親が 15 歳の高校生のときに生まれた子。父親は大学生。母親はトリイを自分の両親に預け、家を出る。

「祖父母がとてもかわいがってくれて、愛情をいっぱい受けて育ったので、わたしは幸せだった」とトリイは語る。

教育心理学者。大学時代に低所得者層の未就学障害児を世話するボランティアをして以来、教員や精神医学研究者としての資格を取得しながら情緒障害児教室、州立精神病院、福祉施設などで働き（Elective　Mutism（選択的無言症）が専門)、そこでの体験を綴ったノンフィクションを多数著している。1980 年に発表した処女作「シーラという子」は世界 29 カ国語に翻訳され、ＴＶ映画化された。

その後も、「タイガーと呼ばれた子」「よその子」「檻のなかの子」「幽霊のような子」「愛されない子」と次々にノンフィクションを発表している。

小説に、心の闇を見つめる確かな目と豊かな想像力で描いた「ひまわりの森」「機械じかけの猫」がある。また、精神科医の斎藤学氏との対話を収録した「子どもたちは、いま」も大きな話題を呼んだ。1982 年に英国人の夫と結婚し、現在は家族と共にスコットランドに住む。執筆活動のかたわら農業を営み、児童心理学の研究も続けているほか、児童虐待や自殺の防止ホットラインの活動にも力を尽くしている。1998 年以来、度々日本を訪れている。

（入江真佐子訳）早川書房　　http://www.torey-hayden.com

「シーラという子」－虐待されたある少女の物語－（ONE CHILD）　処女作

1980 年、アメリカで出版。1996 年３月 31 日初版早川書房

垢で黒ずんだ顔に敵意むきだしの目をした、６歳にしてはずいぶんちっぽけな子供で、ひどい臭いがした－名前はシーラ。季節労働者用のキャンプに住み（父親レンズタッド)、傷害事件（新聞記事－６歳の少女が、近所の三歳の男の子を連れ出し、その子を近所の植林地の木にしばりつけて火をつけた。男の子は地元の病院に入院、重体。女の子は身柄を拘束された）を起こしたために精神病院に入ることになっていたが、空きがなく、トリイの教室に送られてきた。トリイは、あらゆる障害児教室から見放された自閉症や強迫神経症の子供たち８人（ピーター、タイラー、マックス、フレディ、セーラ、スザンナ・ジョイ、ウィリアム、ギレアモー）をすでに抱えていた。シーラは、決してしゃべろうとせず、泣きもせず、何かやらせようとすると、怒り狂い、金切り声をあげて大暴れする。ただでさえデリケートな子供たちがパニックに陥る。こんな扱い憎い子供は初めてであった。しかし、辛抱強く接して行くうちに、彼女が知的障害児どころか、ずばぬけた知能の持ち主であり（ＩＱ 180)、そして、心身に虐待による深い傷を負っていることが分かる。

70 年代のアメリカ、アイオワ州の地方都市に住んでいた精神的にも肉体的にも虐待を受け、愛を知らずに生きてきた６歳の少女シーラが、初めて自分を受け入れ、愛してくれる教師に出会い、花開いていくまでの５カ月間の様子を記録した実話。

トリイ、アントン（季節労働者 29 歳)、ウィットニー（中学生）／チャド（Ｂ.Ｆ弁護士）

シーラは、薬物依存症の父と１４歳で妊娠した母の子。１５歳の誕生日の二日前にシーラ

誕生。母親は、二人の子、シーラと弟ジミーを連れて家出、カルフォルニアへ。途中、町の南５０キロほどの所にある高速道路にシーラを捨てる。
母親に捨てられた心の傷。父親に折檻。ジェリーおじさんから性器をナイフで刺される。出血。病院へ。入院。
トリイとの別れ。シーラからの手紙
トリイへ、いっぱいの”愛”をこめて
他のみんながやってきて
わたしを笑わせようとした
みんなはわたしとゲームをした
おもしろ半分のゲームや、本気でやるゲームを
それからみんなは行ってしまった
ゲームの残骸の中にわたしを残して
何がおもしろ半分で、何が本気なのかもわからずに
ただわたしひとりを
わたしのものではない笑い声のこだまする中に残して

そのときあなたがやってきた
おかしな人で
とても普通の人間とは思えなかった
そしてあなたはわたしを泣かせた
わたしが泣いてもあなたは大して気にかけなかった
もうゲームは終わったのだと言っただけ
そして待っていてくれた
わたしの涙がすべて歓びに変わるまで

児童虐待　1995．10／25 付日本経済新聞によると、全国に 175 個所ある児童相談所で処理した 18 歳未満の児童虐待件数は、1994 年度で 1961 件。91 年度から４年間で、1.8 倍に増加。氷山の一角
　アメリカでは、毎年およそ 200 万人の子供たちが何らかの虐待を受けていると伝えられている。（ドラッグ、貧困等が原因）

「よその子」－見放された子どもたちの物語－（Somebody Else's Kids）1981 年出版
1997 年 5/25 初版発行　早川書房
　シーラと別れた後、大学院で障害児教育の専門資格を取ってから小学校の補助教員として現場に復帰したトリイと、そこで出会った情緒面に障害のある４人の子供たちとの交流を綴ったもの。子供たち同士が互いに支え合い、励まし合う姿が描かれている。
　小学校の補習教室を受け持つトリイのもとに、あらゆるクラスからはみ出した４人の子どもが送られてきた。
　７歳の自閉症の男の子ブーは、気をつけの姿勢のまま固まっていて、何を話しかけても反応しないか、おうむ返しにいうだけ。かと思えば、突然奇声を発して駆けずりまわったり、手をぱたぱたさせている。
　７歳の読字障害の少女ロリは、幼い頃の虐待のせいで、脳に傷があり、字が全く区別で

きないことを恥ずかしがっている。
　１０歳の粗暴な少年トマンは､父と兄を継母に射殺されて憎しみのとりことなっていた。
　１２歳のおとなしい少女クローディアは、無知な行動がもとで妊娠していて、うつ状態だった。
　過酷な運命から彼らを救い出そうと全精力を傾けるトリイから、恋人は去っていく。そしてクローディアはトリィに言った。「いったいどういうつもりなのかわからないの。わたしたちみんな、ここではどうせよその子じゃない。その私たちがなんだっていうの？なんでそんなに気にかけるの？」
　ロリは青い鳥の絵を描いてきて、トリィのために描いた。ぎこちない鳥
ロリ：「ものってほんとは完璧じゃないんだよね。でも、そうしようと思えば、心の中でいつも完璧に見えるんだよ。だからいろいろなものがきれいに見えるんだ」

　メインストリーミング法の制定について
これは涙が出るほど理想主義的な法律だった。これはすべての人は平等に創られているという憲法の言葉をひどく誤解した上で生まれてきた継子だった。どんな人もみな平等ではない。私たちは人間として生まれてくる。その点において、人種や宗教や性別や環境にかかわらず､人は人間としてのすべての尊厳を与えられる､生まれながらの権利を持つのだ。だが、私たちのだれも平等ではない。残念ながら国会はいまだに、十分な官僚制度とお金と法律をもってすれば、平等は達成できると信じている。
　多くの子どもたちにとって、メインストリーミング法は、天からの贈り物だった。とりわけ身体障害を持つ子どもたちにとってはそうだった。彼らは「普通の」子どもたちなのだ。彼らの障害は身体的なことにすぎないのだから。他の人のように早く走れない人や、高く跳べない人がいるのと同じように、彼らはよく見えなかったり、聞こえなかったり、歩けない。そんな彼らを、目が見え、耳が聞こえ、ちゃんと歩ける仲間から切り離して教育しても、多くの点で誰の利益にもならない。だが、この法律から益よりも苦痛の方をたくさん受け取る子どもたちのグループもいるのだ。特に、知的障害や情緒障害を持つ子供がそうだ。習得にに時間がかかる子どもの場合のように、出来る限りがんばっても、絶えず最大限の努力をしても、つねにクラスで一番ばかな子でしかいられないということは、精神的にものすごい打撃を受けてしまう。私が受け持っている子どもたちのように、世界の認識の仕方が人とは違う子や、教室内で集中的で刺激的な関係を必要とする子にとっては、他の子どもたちが三十人もいて、せかせかと先を急ぐ教師が一人というような教室では、どうしてもうまくいかない。こうい子どもたちにとっては、この法律はじわじわと飼い殺しにするようなものにもなり得る。（例、ロリの場合）

　「文明人らしい行動とは、その人が何をやるかではなく、何を我慢してやらないでいるかではかられることの方が多い、と私は思っている。」

”He's got the whole world in his hands ”の曲で
「神は両手にちっちゃい赤ん坊をいだかれた」
「兄弟よ、神は両手にあなたとわたしをいだかれた」
「神は私たちの小さな友達、ブーを両手にいだかれた」
「神は大きくて強いトマソを両手にいだかれた」

「神は私たちの友達、ロリを両手にいだかれた」
「神はクローディアと赤ちゃんを両手にいだかれた」
「神はこの小さな教室を両手にいだかれた」

やがて４人は互いの能力を引き出すようになり、トリイと子供たちの間に特別な絆が結ばれていく。
「ちょっと変だけど、それでもいいよね」。

「檻の中の子」－憎悪にとらわれた少年の物語－（Murphy's Boy）
1983 年出版、プットナム社刊

小さい頃に親から見捨てられ、施設で育った少年ケヴィンは、今まで全く口をきかず、いつも何かから逃れるように机の下に潜り込んでいた。１５歳のケヴィンに根気よく接し、ついに言葉を取り戻させたトリイだったが、彼が自由に話すようになってから恐ろしい事実が判明する。

８年間だれとも口をきかず、一日中ずっと児童養護施設の机の下でおびえていた 15 歳の恐怖症の少年ケヴィン。セラピストである著者の長い努力のすえ、少年はようやく言葉を発するようになり、身の毛もよだつ虐待の事実を明らかにしていく。怒りと憎しみの虜となった少年に、救いの道はないのか？　情緒障害児との交流を綴った数々のノンフィクションで世界中の読者の反響を呼んだベストセラー作家の問題作。

「愛されない子」－絶望したある生徒の物語－　（JUST　ANOTHER　KID）1988 出版

自分の教える情緒障害の子供たちとの交流を縦糸に、生徒の母親で自らも精神的な問題を抱える女性との絆を横糸にして描いた作品。この教室がトリイのアメリカでの最後の教室となり、以後彼女はイギリスに渡った。

ラドブルック（レスリーの母）（もうひとりの子）トリイのボランティア
地元の大金持ちの夫人で美貌にも知性にも恵まれ、何不自由ないはずなのに、酒に溺れ、不倫を重ねては地域の顰蹙をかっていた。夫トムは画家。

６人の生徒との一年間の様子を綴る
レスリー
ダーキー
マリアナ
シェイミー（ジェラルディンとシェモーナのいとこ）　北アイルランド出身
シェモーナ　同
ジェラルディン（シェモーナの姉）　同

「幽霊のような子」－恐怖をかかえた少女の物語－（Ghost Girl）1991 年出版

「タイガーと呼ばれた子」の最後で、トリイが新しく赴いていった任地で出会った少女の物語。今まで学校では一言も発しなかった少女が、トリイと出会った日に喋るようになった。だが、やがて少女の口からは、カルト信仰の犠牲にされているのではと思えるような、恐ろしい話が語られた。

この子はまるで幽霊みたいだ－私立のクリニックを辞め、再び教育の現場、小学校の情

緒障害児クラスの教師となったトリイにとって、８歳の少女ジェイディは今まで出会ったどの子より不可解だった。周りが何をやっても、ジェイディは顔色ひとつ変えず、誰とも一言も話さない。全くの無反応なのだ。

何よりもトリイを驚かせたのは、その病的な姿勢だった。体をほとんど二つに折り曲げ、上目遣いにこちらを見上げる姿は異様なほどだった（「あたしの中身がこぼれ出てしまう」）。だが、ある日トリイは偶然の機会に、まっすぐに立つジェイディの姿を目撃する。あの異様な姿勢は、口に出せない問題を抱える少女の、助けを求める悲痛な叫びなのか。

次々と予期せぬ反応を見せ始めたジェイディが、少しずつ心を開いて語りだしたのは、陰惨な性的虐待を繰り返す忌まわしいカルト集団の存在だった。

相談する相手もない孤独と不安の中で、自信を失ったトリイは真実をつきとめ、ジェイディを救うことが出来るのだろうか。

「タイガーと呼ばれた子」－愛に飢えたある少女の物語－（The Tiger's child）

1995 年に出版　　1996．９/30 初版　早川書房

その後のシーラ

「あんたは自分があたしの人生をよくしたと思ってるんでしょ？　あんたのおかげでよけい悪くなったんだよ。うんとうんと、何百万倍も悪くなったんだよ！」

情緒障害児教室の教師をやめてセラピストとなったトリイが目の前にしているのは、髪を派手なオレンジ色に染めた１４歳のパンク少女シーラだった。

八方手をつくして探し、７年ぶりにようやく再開したシーラは、かつて二人の間に築いた信頼関係や教室での楽しかった日々など全く覚えていないという。彼女が少しでも打ち解けてくれることを願い、夏休みの間だけ精神科クリニックで手伝いをしてくれるように誘った。やがてシーラの口から、まだ７歳にも満たない頃から連日のように受けていた性的虐待の事実が明るみに。

「ヴィーナスという子」－存在を忘れられた少女の物語－（BEAUYIFUL CHILD）

2002 年６月 30 日初版発行　　早川書房

小学校の障害児教室で教えることになったトリイは、初日の朝、石塀の上に超然と座り、まるで昔のハリウッド女優のようなオーラを放つ少女に目を奪われた。

その**７歳の少女ヴィーナス**は、周りからの働きかけにも完璧なまでに反応を示さない。その一方で、他人が近づきすぎると、手のつけられないほど大暴れして相手も自分も傷つけるのだ。また、ヴィーナスは学校を休みがちで、毎日付き添ってくる姉に事情を訊ねても、知的障害のある姉は「ビューティフル・チャイルド」とつぶやくだけで埒があかない。

その他の子供

ビリー・ゴメス…９歳のラテン系の小柄の少年。黒い髪ぼさぼさ。派手な色のシャツが好き。汚い爪。すぐに癇癪を起こす。言葉が恐ろしく汚い。攻撃的。ケンカ早い。
以前二つの学校で放校処分。社会的経済的に恵まれない家庭。

シェーンとゼーン…赤毛の男の子。一卵性双生児。６歳。腹話術の人形のよう。

ＦＡＳ－胎児期アルコール症候群。妖精のような顔つき。ＩＱは境界線。多動と注　意力欠陥。

ジェシー…アフリカ系アメリカ人。黒人。８歳。ほっそり。ビリーとしょっちゅうケンカ。トゥーレット症候群。目をパチパチさせる（チック）。頭をグイと動かす。鼻をすすりあ

げるようにくんくん鳴らす。数種類のチック。異常なまでに几帳面。（神経質で潔癖な子？）
社会的経済的に恵まれない家庭。
グウェン（グウェニー）（途中から）８歳。ブロンドの髪。濃い色の目。高機能自閉症→アスペルガー症候群。聡明な子。外国の国についての百科事典的知識を持つ。しかし、人とのコミュニケーションがとれない（社会性がない）。

　ヴィーナスのかかえる問題が一体何なのか模索するトリイの前に、思わぬ障害が立ちふさがる。助手のジュリーがトリイの型にはまらない教育の手法にことごとく異議を唱え、二人の間の溝は広がっていく。
　昼休みの間の出来事。トリイがいないとき、ヴィーナスが激怒。一年生の男の子を追いかけた。男の子はうんていから落ちて、腕の骨を折り、頭を打った。救急車。
校長のボブは、ヴィーナスを放校処分にする。
　ヴィーナスは、テリの子ではなく、テリの前の夫が知恵遅れの 13 歳の子ワンダに生ませた子らしい？　知的障害のある姉（実は母？）ワンダは、ヴィーナスのことを「ビューティフル・チャイルド」とつぶやく。
　クリスマス休暇に入る二週間前に、ヴィーナス戻ってくる。家庭問題のため。
　そんな冬のある日、記録的な寒波で町のすべての活動がストップした。そのわずか数日の間に、ヴィーナスの身に予期せぬ恐ろしいことが起きていた……。
ヴィーナス、低体温症で病院に運ばれる。意識不明。児童虐待の疑い濃厚。
母テリーとボーイフレンドのダニー、逮捕される。
５月、「不思議の国のアリス」のようなアリスがクラスに加わる。
助手として、ジュリーの代わりに、ローサが来る。トリイの良い助手となる。
ヴィーナスは、里親キヴィーに引き取られる。車椅子（足指を凍傷で切断）に乗って登校する。アリスとの関わり。トリイの働きかけで、歩こうとするヴィーナス。
夏休み前最後の日、トリイは、子供たちに一年間で一番好きだったことを書かせる。
ヴィーナスの言葉は「しあわせです」だった。
　情緒障害児との心の交流を描き、世界中に感動を呼んだ著者が、福祉の連携の難しさ、教育の理念と実践の対立など、新たな問題に立ち向かう渾身のノンフィクション。

ヴィーナスが低体温症で入院したとき、ビリーたち、死がこわいと言う。
「うん、おれも死ぬのはこわいよ」とジェシーがいった。
「うん、おれもだよ」とビリーが同意した。
「わたしも、そうだわ」とわたしはいった。
「でも、それってわたしたちを生きていることに集中させるために自然とそうなっているんだと思うわ。だってこわくなかったら、自分の命を粗末にしてしまうかもしれないでしょ。だけど、死ぬってたぶんこわくないんじゃないかって思うの。わたしたちみんながいつかは死ぬんだとしたら、自然なことのはずだわ。ちょうど成長するのと同じように。だから、その時が来たら、たぶん心の準備ができて、こわくなくなるんじゃないかな。たとえば、すごく小さい子は、大きな子たちが学校へ行くのを見て、こう思うわ。"学校へ行くってすごくこわそう。ママから離れて一日中家から離れていなくちゃいけないんだ。そんなことぜったいできない”って。
でも学校に行くくらいの年齢になると、こう思うの。"なかなかおもしろそうじやない。

待ちきれないぐらい”って。で、学校に行くと、大きな子どもたちが学校の教科書を読んでいるのを見て、こう思うの。"すごく難しそうだな。ぜったいあんなの読めるようになれないよ。こわい”って。でも四年生や五年生になって、同じ本をもらって見てみると、こう思うのよ。"なかなかおもしろそうじゃない”って。そのころまでに、その子も成長していて、前に、準備ができていなかったころにはこわいと思ったことが、いまではこれでちょうどいいと思うのよ。だから、死ぬことも同じじやないかと思うの。その時が来れば、たぶん心の準備ができるんだと思う。そうなったら、たぶんこわくないんじゃないかな」（トリイの言葉）

「ひまわりの森」（The Sunflower Forest）　　フィクション
1999 年 9 月 30 日初版発行　　入江真佐子訳　　早川書房

引越しを繰り返す家族。現在はカンザス在住、母マーラの心をいやすことが出来ない。

パパ　オマリー　妻マーラをやさしく包み込む。
　　ウェールズから帰ってきたレスリーに、次のように語る。
　　「いろいろ欠点はあっても、見返りを要求することなく、あるがままのその人を愛するのだ」。
ママ　マーラ　10 代での悲惨な戦争（第二次世界大戦）体験。心を病む
　　ホステルでレイプ。アーリア人種の子供を産ませられる。
　　一人目の子、クラウス。ナチスに取り上げられる。
　　二人目の子ジョーゼフ（自分で殺す、窒息死）
　　その後、収容所送り。
　　近所の少年（トビー・ウォーターマン）を我が子（クラウス）だと思い込み、つきまとう。逮捕され、精神科の医師にかかるが、治らない。
　　少年と、その家族（ナチスだと思い込む）を射殺。
　　自分は警察に打たれ、死んでしまう。

レスリー（17 歳の娘）の目を通して語る。
　　母マーラの死後、昔、父母が住んでいたウェールズに行ってみる
　　母が言っていた「ひまわりの森」は「オオカミの森」であると知らされる。
　　その後、カンザスに帰る。
ミーガン（レスリーの妹メグズ）10 歳

「機械じかけの猫」上・下（THE MECHANICAL CAT　1998）　　フィクション
2000 年 7 月 31 日初版発行　　入江真佐子訳　　早川書房

３つの話が平行して語られる。最後にひとつにまとまる。
①ニューヨークから、妻と離婚してサウスダコタにやって来た心理セラピストジェームズ。彼のもとに、地元の有名作家、ローラ・デイントンの９歳の息子、コナーが連れてこられる。（ネコのぬいぐるみを離さない）
コナーには、自閉症との診断が下されていたが、セラピーをして行くうちに、自閉症では

ないのではないかと思い始める。
最初は、ほとんど会話が出来なかったコナーだが、ジェームズに心を開いて行くにつれ、心にしまい込んでいたことが明らかにされていく。
それに従って、少年の心の中に、恐ろしい秘密が隠されていることが徐々に明らかになってくる
このコナーの話の中に、彼の６歳の妹、モーガナの話も出てくる。

②２番目の話は、コナーとモーガナの母親であり、有名作家であるローラ自身の話。
彼女が里子に出されていた自分自身の生い立ちから、今に至るまでをジェームズに話す。里親の家の１歳違いの兄から性的な虐待を受けたこと、空想好きな少女だったこと。実の父親の家に戻ってからの、父親の再婚相手である継母との価値観の決定的なズレがもたらす奇妙なやりとり。書くことの魅力に取り付かれたこと。その後、医学を勉強したことなどが生き生きと語られる。

③３番目の話は、そのローラの想像力が生み出したもうひとつ別の世界の話。森に生きるトーゴンという女性の長い物語。

これら３つの物語が、最後につながっていく。